

【研修報告】

「The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars」 に参加して

中 村 敦 子, 奥 村 ゆかり, 勝 田 真由美, 渡 邊 聡 美

はじめに

東アジア看護学研究者フォーラム (East Asian Forum of Nursing Scholars:以下 EAFONS と呼ぶ) は、1997年から香港理工大学の主催により開始されている看護系大学の博士課程の大学院生及び修了生、大学院教育に携わる教育・研究者を対象とする国際研究フォーラムである。EAFONS は東アジアで年1回開催されており、現在、加盟国は韓国、シンガポール、タイ、台湾、フィリピン、香港、日本の7ヶ国である。第20回 EAFONS は、2017年3月9日から10日の2日間、香港において開催され、500題を超える発表があった。(表1)。

ローバリゼーションにおける将来の方向性、研究を通じて実践をさらに発展させることが提示された。



写真1 Opening Ceremony

表1 スケジュール

Date		Contents	
9 March 2017 (Thursday)	AM	Registration Opening Ceremony Keynote Address 1 Round Table Discussion	Poster Viewing ↓
	PM	Symposium Concurrent Session	
10 March 2017 (Friday)	AM	Registration Keynote Address 2 Plenary Discussion	Poster Viewing ↓
	PM	Workshop Concurrent Session Invited Talk	

The 20th East Asian Forum of Nursing Scholars

今回の大会テーマは“Globalization and Research in Doctoral Nursing Education”であった。博士課程の看護教育内容やグローバリゼーションの効果に関する情報共有により、看護教育における国際基準による普遍的な能力の均一性の保証と各国の看護学の向上を目指した。主要なテーマとして、博士課程教育における根拠に基づく実践、Doctor of Nursing PracticeとDoctor of Philosophy in Nursingとのディスカッション、博士課程の看護教育を確立し看護の専門化を促進する技術革新と経験、看護学生の海外における学修の機会と課題、看護教育と研究のグ

大会長講演で Lorna Suen 女史は、本大会に参加することにより、様々な健康問題や経済・社会的状況に対応するために、ケアと介護の中核的価値がどのように研究され教えられているかが明らかになること、東アジア地域における看護と、学生の留学に関する課題を検討し、看護教育/研究のグローバル化における今後の方向性と研究と学術活動が、看護実践の進歩にどのように貢献できるかを考察することの2つの主な目的について話された。最新の動向には、グローバリゼーション、ヘルスケアの推進と提供、看護科学と看護教育、看護実践、教育そして研究を挙げ、私たちは将来を見通す洞察力と新しい解決策を提案する大胆さを持っていなければならないと締めくくった。

基調講演では、University of Washington School of Nursing, USA の Azita Emami 女史が、博士後期課程の数十年にわたる研究の臨床的影響と将来の看護課題である世界の人々の健康に影響する重要な6つの動向について話された。1つには健康と食料安全の改善が挙げられ、世界の人口の高齢化と需要の増加に対応するためには、看護師が十分なレベルの専門知識を発揮できるようにするための政策や法律が必要であると述べられた。2つには移住と人口移動の増加が挙げられ、国籍の多様性が増し、職種間の協働や介護者の文化的能力がこれまで以上に重要であること、3つには家族介護からより専門的な介護者

への転換が挙げられ、グローバル化に伴う家族構造の変化により、高齢者ケアが専門的な介護職種に取って代わられているが、依然不平等が残っている。女性の雇用において経済的な不平等が生じており、男女ともに平等な雇用条件を与える必要があること、4つには遠隔地とのコミュニケーションを通じた知識と情報スキルの変化が挙げられ、インターネットへのアクセスとモバイル機器を用いたeラーニングは、国際基準に適合するエビデンスベースの知識を向上させるのに役立つこと、5つには保健医療において、病気の予防と治療および人々の健康に貢献する看護師の役割が拡大し、プライマリケアの提供者として益々重要な存在と位置付けられること、6つには財政と人材の両方の医療資源の不足が挙げられ、専門的な訓練、研究、およびキャリア成長の機会を通じて、看護師の能力の向上に努めることが継続的な課題であることが述べられた。

表2 示説17のカテゴリー

Topic Category (17)	
健康増進 疾病の予防	がんと緩和と終末期ケア
高齢者介護と健康長寿	補完代替医療
医療政策と管理	家族・地域看護学
災害看護	医療倫理 法的問題
看護教育と看護の専門化	感染管理
革新的な健康と科学技術の進歩	健康と経済
精神保健看護学	慢性疾患の管理
回復期ケアとリハビリテーション看護	看護医療のエビデンスに基づく実践
救急ケア	

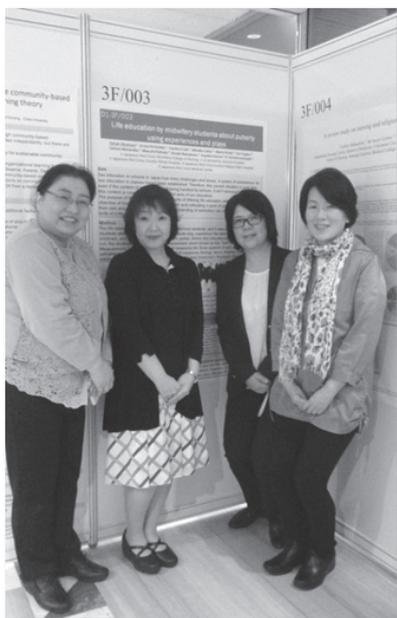


写真2 示説発表

本大会の総演題数は546題であり、日本からの演題数は358題で65.6%を占めた。日本からの口述発表は32.9%、示説発表は71.3%と、示説発表に対し口述発表は少なかった。示説発表は17のカテゴリーに分類され(表2)、奥村、勝田、渡邊、中村は「健康増進 疾病の予防」で、中村は「家族・地域看護学」のカテゴリーで発表した。

学会発表の内容

1. 奥村、勝田、渡邊、中村は、「Life education by midwifery students about puberty using experiences and plays」を示説発表した。

男子44名、女子57名の中学生を対象に、助産学生による生命教育を実施した。教育実施前後に、「自尊感情測定尺度」および花沢の「対児感情尺度」の測定を行った。自尊感情測定尺度の「自己」と、教育の理解度が男子より女子のほうが有意に高いという結果を得た。また、対児感情の回避得点と拮抗得点の変化率が高い生徒ほど、教育に否定的な感想を持っており、教育の理解度が高い生徒ほど、肯定的な感想を持っていた。自由記述の総コード数は、男子は240、女子は355で有意差が認められた。コードから「親になるための貴重な体験」「生命の大切さ」「無事に生まれることへの奇跡」「生命の誕生の過程について考えるきっかけ」「胎児がお腹にいることの大変さの実感」「家族への感謝」「自分や周囲の人を大切にしたい」「妊娠中の喜びや期待」の8つのカテゴリーが抽出された。

2. 中村は「Features of support provided to primipara women by their mothers that helps them to obtain their role as a mother」を示説発表した。

母親役割獲得において助けになった実母の支援の特徴を明らかにする目的で、初産婦15名に半構造化面接を実施しカテゴリー化した。その結果、「睡眠不足の解消による心身の回復」「自分の育児に対する全面的な承認から生じる見守り」「試行錯誤し新生児に応じた育児方法を一緒に見出す」「新生児の表情を読み取り我が子に適した育児方法の手本を示す」「精神的に楽にいられる環境の提供」「育児方法の選択肢を広げられるような助言の仕方」「自立に向けて支援の手を徐々に緩める」などの12の概念が見いだされた。これらの支援の特徴を祖母に向けた学級で広めることで、母親役割の取得を促進できる可能性が示唆された。

おわりに

今回20th EAFONSに参加して、グローバルゼー

ションにおける博士課程後期の今後の方向性について学ぶことができた。特に、看護の専門職業・実践教育を極める Doctor of Nursing Practice と学術理論研究を極める Doctor of Philosophy in Nursing のディスカッションが重要であることや、多様な国籍を持つ人々への理解を深める必要性について印象深

く心に残った。

研究にご協力いただきました皆様には深く感謝いたします。また、本フォーラムへの参加発表は、日本赤十字広島看護大学海外出張旅費助成を受けました。このような機会を与えてくださいました本学の関係者の皆様に深く感謝いたします。

